

平和の炎 Vol. 1

第1回読谷村平和創造展

—— 平和郷はみんなの手で ——



上陸後、渡具知海岸に軍需物資を陸揚げする米軍

読 谷 村



序にかえて

読谷村長 山内 徳信

読谷村での初めての平和創造展を開催するにともない、この小冊子を発刊する運びとなりました。

これまで、村民の全面的なご協力、ご支援により平和村づくりを進めてまいりましたが、あらためて戦争とは何か、そして平和とは何かを問い直し、日常生活の中で平和問題を考える機会としたというのが本展の主旨であります。

思えば戦後43年間、読谷村民は持てる英知と情熱の限りを尽くし、平和郷読谷の建設のため頑張ってきたのであります。それは、去る沖縄戦で多大な犠牲の上に私達が学びとった教訓を村政の中に生かし、二度とあのような戦禍に巻き込まれることがないような地域社会をみんなの手で築き上げる過程でありました。

さて、沖縄戦の教訓とは何でありましょうか。それは沖縄戦という悲惨な体験が、戦争というものの実態がいかなるものであるのか、その真相を暴露してみせただけでなく、軍隊というのが人々の安全を守り、平和と自由を保証してくれるどころか、結果的には破滅をもたらす以外の何物でもないことを証明してみせたのです。すなわち、軍隊は国民の生命、財産を守りうるものではなく、実際には個々の国民一人びとりにあらゆる意味での犠牲を強いる強権として存在したということでもあります。

さらに、沖縄戦は本土における防衛態勢を確立するための時間稼ぎの「捨て石」作戦でしかなく、沖縄は本土防衛の防波堤に供された結果20万人余の人命を失うほどの致命的な犠牲を蒙

ったという事実も忘れてはならないのです。

戦後の読谷村のむらづくりは、昭和21年8月から具体的に始められ想像を絶する苦難の道を歩んできました。それは、まず焦土廃墟の中から生きていくための生活の場、生産の場を求めての活動であり、基地に囲まれた生活の中での生命の安全を確保するための道程でもありました。

そうした中にあっても、読谷の人々は沖縄の心（差別するのではなく、人間を大切にし、痛みを分かち合う心、平和を愛する心）を守り育て、今日の文化村の基盤を形成してきたのです。

平和な社会を実現することは、この沖縄の心を土台に、みんなが理性的、知性的なものの見方、考え方をすることが大切であり、それはまた常日頃の努力によってしか実現できないのであります。

最近の国際情勢を見ても、世界24カ国4,000にもおよぶ自治体が非核宣言を行い、草の根的な運動とも相伴って連帯の輪を広げてきています。

読谷村でも1982年6月に非核宣言を行い、その輪の一員として活動しております。

また、施政方針でもここ10数年来、日本国憲法の平和主義（精神）を内外に訴えているのですが、読谷飛行場におけるパラシュート降下演習の激化や滑走路損壊査定訓練など、けっして平和な村とは言えず、常に生命の危険となり合わせに生活している現状からみても、平和施策として全世界的な非核、反戦平和の構築に努力していきたいと考えています。

地方自治行政は、その地域住民の生命財産を守り、生命が脅かされない生活環境の確保が第一義的な目的であります。すなわち、「平和に勝る福祉はない」のであります。戦争を起こすのも人間であります、しかし同時に戦争を拒

否し平和な社会を築き得るのもまた人間であります。我々にとって今後とも村民が理解し協力しあって反戦平和の具体的な取り組みを進めていくことが重要であります。

1988年12月8日

目 次

序にかえて

第一部 読谷村と沖縄戦

1 . 戦時体制

- 1) 『読谷村誌』座談会より 1
- 2) 当時の状況 2

2 . 読谷飛行場建設

- 1) 建設経過 4
- 2) 土地接收(座喜味) 5
- 3) 徴用(宜野湾出身者)(読谷出身者) 6

3 . 10・10空襲

- 1) 『読谷村誌』座談会より 7
- 2) 10月10日の空襲 7
- 3) 10・10空襲体験 8
- 4) 昭和19年10月10日 9

4 . 防衛隊

- 1) 防衛召集概況一覧表 10
- 2) 読谷村出身者の防衛隊体験 10
- 3) 読谷村へ召集された人の防衛隊体験 11

5 . 米軍上陸と読谷での戦闘

- 1) 『読谷村誌』座談会より 13
- 2) 米軍上陸早々の住民捕虜 14
- 3) 義烈空挺隊の攻撃 14

6 . 空襲と避難・疎開

- 1) 『読谷村誌』座談会より 15
- 2) 村民の避難 16
- 3) 国頭疎開 17

7 . 終戦・収容所

- 1) 『読谷村誌』座談会より 19
- 2) 捕虜収容所 19

8 . 読谷村建設	
1) 読谷村建設隊.....	21
2) 読谷村民各地区分散居住状況調.....	22
3) 村民の帰村状況.....	23
4) 字への復帰状況.....	23
9 . 平和の誓い新たに	
1) 読谷村の字別戦没者数（軍人・軍属）.....	25
2) 慰霊の塔にこめられた想い.....	26

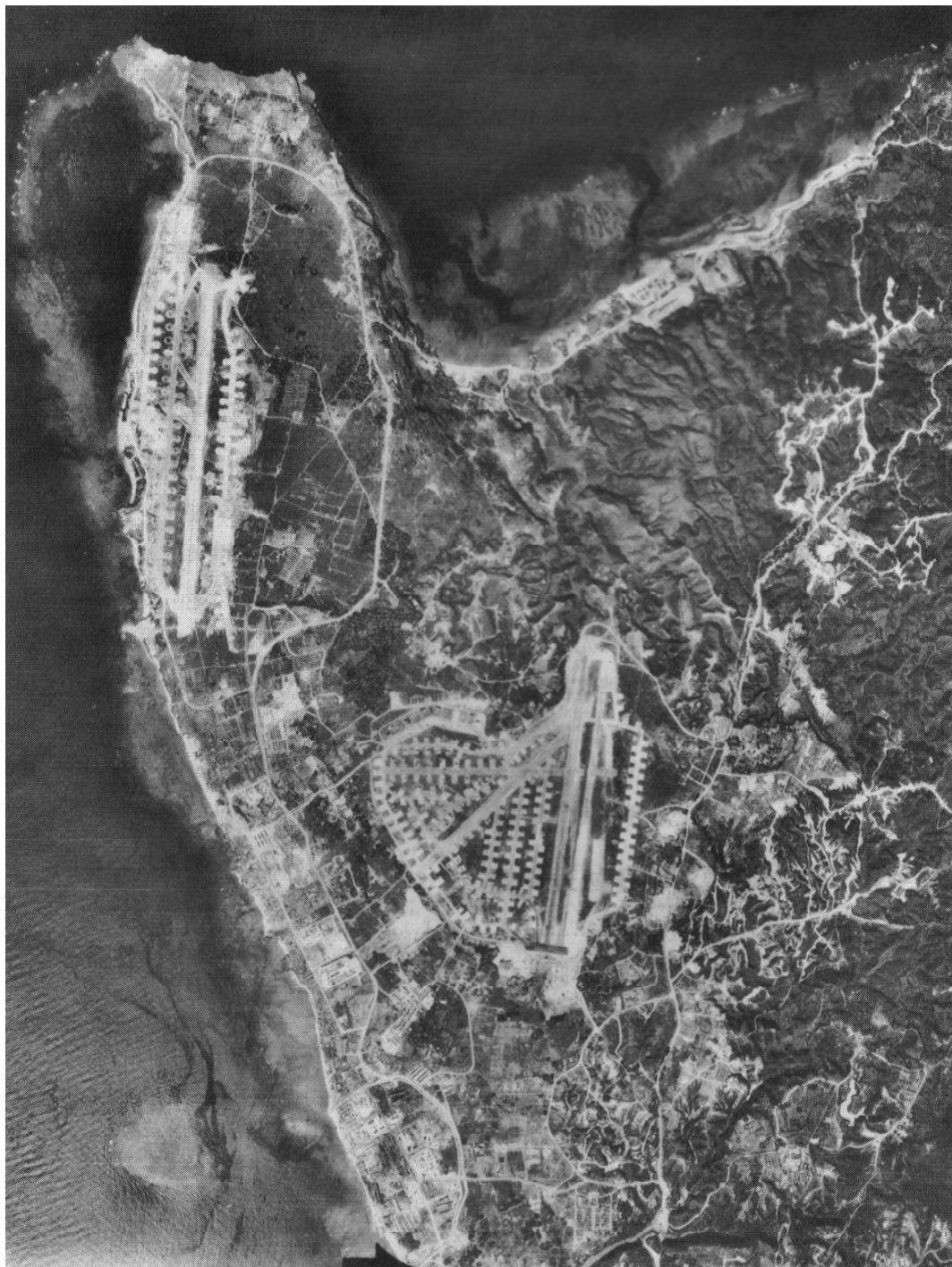
第二部 平和村づくりの経過

1 . 読谷村における軍用地の変遷	
1) 占 領 時.....	29
2) 講和条約発効時.....	29
3) 復 帰 時.....	29
4) 現 在.....	30
2 . 現在の読谷村内の基地の実態	
1) F A C 6022嘉手納弾薬庫地区.....	35
2) F A C 6027読谷補助飛行場.....	38
3) F A C 6036トリイ通信施設.....	40
4) F A C 6026楚辺通信所.....	42
5) F A C 6021瀬名波通信施設.....	44
3 . 読谷村の反基地・平和運動の経過	
1) 米軍不発弾処理場撤去の闘い.....	46
2) 米軍アンテナ基地建設反対の闘い.....	54
4 . 返還軍用地の跡地利用	
1) ボーローポイント射撃場飛行場一帯.....	65
(1) 農業生産基盤の整備.....	65
(2) 集落基盤整備事業.....	69
宇座地区、儀間地区復帰先地公共施設整備事業	
(3) 残波岬総合公園整備.....	80
(4) ゴミ処理場（一般廃棄物最終処分場）整備.....	84

2) ボーローポイント射撃場Aサイト(座喜味城一帯).....	84
(1) 座喜味城跡環境整備事業.....	85
(2) 座喜味城跡総合公園.....	89
3) 読谷補助飛行場.....	90
(1) 座喜味地区農村基盤総合整備事業.....	90
(2) 公共施設整備.....	92
(3) 集 落 整 備.....	95
喜名地区移転先地公共施設整備事業	
4) 嘉手納弾薬庫地区.....	96
(1) 長浜ダム建設.....	96
(2) 沖縄ハム総合食品(株)読谷工場.....	96
5) 波平陸軍補助施設(都屋高射砲部隊).....	97
読谷村診療所、県立都屋の里、県立よみたん救護園	
読谷村農村婦人の家	
6) トリイ通信施設.....	98
(1) 渡具知地区復帰先地公共施設整備事業.....	98
(2) 渡具知地区土地改良総合整備事業.....	105
(3) 古堅南小学校.....	105
7) 嘉手納住宅地区.....	106
(1) 古堅地区土地区画整理事業.....	106

第三部 今なお残る戦後処理問題

1) 旧日本軍接收用地.....	109
読谷飛行場問題解決へ向けて.....	109
2) 読谷飛行場における米軍パラシュート事故記録.....	113
3) 資 料 編	
パラシュート降下ミスによる事件・事故写真.....	117
拝啓「日本政府殿」.....	119
新聞記事 切り抜き.....	122
編集を終えて.....	131



1945年12月10日

米軍撮影航空写真、米軍は占領後すぐに本土攻撃の基地を構築。村内各地には米軍物資が山積みされ、読谷飛行場とボーロー飛行場には無数の戦闘機がみえる。上陸後わずか9ヶ月のことである。



現在の読谷村

第一部

読谷村と沖縄戦

1. 戦時体制

1)『読谷村誌』座談会より

読谷戦記

- 太平洋戦争のあとさき -

語る人 比嘉良正 当山真志
喜友名正 謹比嘉憲四郎
上地武成 花城景孝
宮本万次郎 知花英夫
神谷常敏 知花平良
司会 村長・池原昌徳

次の項目以下『読谷村誌』座談会よりと略

上地 読谷に最初に駐留した部隊は混成旅団でした。そのあと、実戦の経験を積んだ山部隊や村上大尉の指揮する球12526高射機関砲部隊の三中隊、渡辺大尉の指揮する球12524高射砲隊が座喜味城跡に陣地を構えていました。それから渡具知に暁部隊という船舶隊と減部隊という通信隊が配備されていました。

宮本 陣地は飛行場周辺に構築されたが、将校は民家に分宿していました。そのため瓦葺のいい家はほとんど兵舎に調達され、家主はアサギ住いになってしまった。

喜友名 学校や字の事務所なども兵舎として調達されましたネ。飛行場建設のために、読谷山国民学校は、昭和18年に喜名の分教場に移転させられました。校区の青年会や婦人会の奉仕作業で分教場の運動場に校舎が建築され、北側の山を切り開いて運動場をつくりました。その間、児童は各字の事務所やアシビナーを利用して授業を受けていました。昭和19年の6月

ごろに喜名の本校の新築工事が完了、開校することになったが、子供たちが机を運び明日から授業をはじめるといときに、ここも軍に接収されて兵舎になってしまった。

神谷 飛行場周辺の山は、いたるところに横穴の陣地が構築され、壕の内柵にするために村有林はすっかり切り出されてしまいました。だから山部隊のことを『山切り部隊だ』とさえいわれていましたネ。(笑い)

上地 10・10空襲以後は、ひっきりなしに空襲を受けましたネ。だから、飛行場警備隊は空襲で破壊された滑走路の弾痕整備が主な任務になっていましたネ。空襲ではサーターグルマが高射砲と間違えられてよく爆撃を受けたので、木のオトリの高射砲や飛行機がつくられていましたネ。



読谷飛行場のオトリ飛行機（県立平和祈念資料館蔵）

比嘉 そのころからは、完全に軍事体制がしかれ村民は食糧増産の指示を受けて、増産にはげんだが、米・大豆・甘藷・野菜・甘蔗の枯葉まで供出させられた。家畜もすべて番号が付されて登録され、自由に屠殺することはできなかった。馬はすべて飛行場やその他の陣地構築のため徴用されているので、19～20年期は各字のサーター屋では砂糖はつくれなかった。キビは知事名で嘉手納と西原の工場に搬入するよう指示が出されていましたネ。

宮本 大湾では、兵隊がキビを刈り出し、馬の代わりに10人位の兵隊がサーターグルマを回してキビをしぼり、黒糖を作っていましたネ。(笑い)

花城 飛行場の建設が始まるようになってからは、村政も完全に戦闘協力のためのものだけになっていましたネ。

残波岬には高射砲陣地があり、字事務所は兵舎になっていた。部落周辺には掩体壕がたくさん掘られていた。ヤーガーの周辺の畑にも交通壕やタコツボ、散兵壕があった。本当の陣地は残波岬にありながら部落に陣地があるようにカムフラージュしてあった。

(『残波の里 - 宇座誌 - 』より)

2) 当時の状況

昭和10年代に入ると、新聞記事も戦時色が濃くなって来る。「武勲の勇士、征戦、皇軍、翼賛会、奉仕、供出、銃後の献金、食糧増産」などの見出しが氾濫し、各字には陣地や兵舎が構築され、女子を含む青年団や婦人会等も食糧増産の奉仕作業などにかりだされ、戦時体制に組みこまれていった。

陣地・兵舎

与比原(座喜味城跡手前)に茅葺きの兵舎があった。また、球部隊、山部隊の駐屯地・塹壕練兵場等があり、北海道からの兵隊が多かった。

(高志保での聞き取りより)

慰安所

高志保1367番地屋号森奥原(ムイウクバル)は当時の高志保でもかなり大きな家だった。家族は明治時代にハワイに移民しており、おばあさんが一人で暮らしていた。軍からの要請に「貸さない」と言っていたが、「軍に協力しないつもりか」と銃剣で脅され、強制接收された。

(高志保での聞き取りより)

供出・徴用

字喜名の事務を取扱うのは、区長の安里忠次郎さん、書記の私、それに小使(サジ小)の松田栄喜君の三人で、平時は字事務所に詰めていた。(中略)当時の喜名は、戸数が317戸、人口が1346名であった。(字はいくつかの



比謝川の土手沿いにつくられた洞穴と塹壕

組に分けられ、各組には組長がおかれ、組長の仕事はこういう場合に出てくるだけであった）各組から集められた供出物（豚・大豆・大根・野菜など）を〇〇部隊に届けるのは、私と栄喜君の務めだった。状況は日増しにけわしくなり徴用の通達は毎日のように来た。人間はいるだけしかないのに、徴用で働いている人にさらに徴用令が来たりして、全く手におえない状態がつづいた。（中略）当時の字事務所（公民館）は島尻や国頭あたりから徴用令をもらって行き交う人々の宿泊所にもなっていたので、そういう人々でごったがえしており、我々は事務所の片すみで仕事をしていた。

（『ひたすら音づくり』又吉真栄著より）

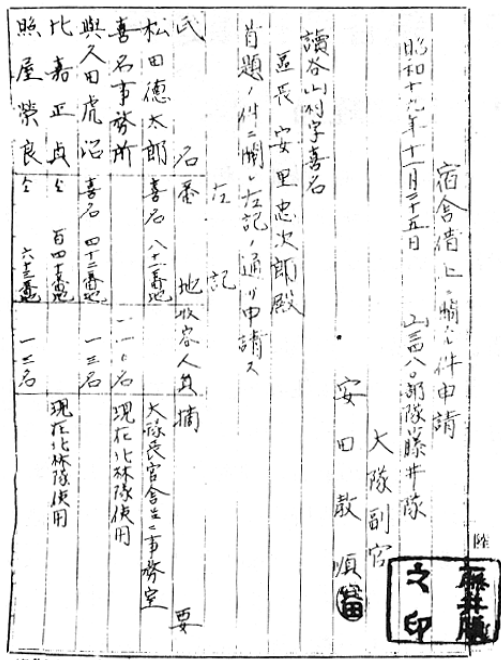
婦人会

第二次世界大戦が勃発してからは、婦人会も大日本帝国婦人会（国防婦人会）として活動するようになる。主な活動としては、出征軍人の送迎、兵隊の慰問、慰問袋・千人針づくり、かんざし・みそ・野菜・いも等の供出、戦死者の遺骨のお迎え、防空演習、竹やり訓練、服装の改善等で、軽装し髪は結うようになる。その他学事奨励会への参加、清掃検査等があった。

（読谷村内での聞き取りより）



応召兵武運長久の祈願祭（喜名観音堂）手前に婦人たちの姿が見える。



昭和19年、字喜名に山部隊が駐屯してきた時の宿舎借上げ関係書類



喜名青年団（字喜名青年団共同耕作地にて）

2．読谷飛行場建設

1) 建設経過

北（読谷）飛行場は昭和18年夏、日本陸軍航空本部により計画され、軍司令部の航空主務者釘宮参謀や松原吟司大尉などが偵察を行ない、目をつけたものであるが、建設業務は民間土建業者（国場組）の手によって実施された。沖縄本島では、飛行場建設が、中（嘉手納）、南（小禄）、伊江島、宮古、石垣にも並行して進められたが、これらの飛行場建設は那覇にある第19航空地区司令官青柳中佐の指揮下にあり、読谷飛行場には天野少尉が配置されていた。北及び伊江島は完成をみないまま、米軍の上陸前に破壊され、使用不能のまま米軍に占領されたが、日本防衛庁戦史室の史料によればその建設には住民の多大な協力があつたと次のように記されている。

『航空基地設定に充当された飛行場大隊は、基地設定用の器材が整備されていなかったため、スコップ、十字鍬、もっこ、馬車など原始的器具を利用するほかなく、多数の一般住民の労力に依存しなければならなかった。各飛行場とも平均3000名の民間人を人夫として雇傭することを目途として計画が推進された。人夫及び荷馬車の雇傭は各町村に割り当て、10日～1カ月交代制で行なわれ、緊急工事のため作業時間は1日11時間にも及んだ。雇傭賃金は支払われたが、問題は食料にあつた。自宅からの通勤者はまだよいが、遠くからの泊りこみ作業員の食料取得は特に困難だった。このため日本軍は6月5日から食料諸品の補給を開始した。主食（米）は1日4百グラム（通勤者は135グラム）が支給された。』

また、19航空地区司令部の陣中日誌と第50飛行大隊日誌（防衛庁在）には、本島南・東・

中・伊江の飛行場建設に投入された労務者の数やその内訳などが記されてあるが、読谷飛行場についての史料が見当たらないのは残念である。本島東・南・中の飛行場が7万人前後となっているので、それより類推するほかはあるまい。

北飛行場の建設工事は、陸軍航空本部と国場組の契約により、球9173部隊の指揮下に1年6カ月余にわたって進められたが、当時設営工事管理責任者のポストにあつた沖縄通運株式会社々々長国場幸吉氏の話はこうだ。

読谷飛行場の工事予算は2300万円（当時の通貨価値は現在の250倍といわれている）という。予算規模だけからいっても、沖縄では歴史上かつてないケタ外れの大事業だった。面積も東洋一といわれ、73万坪で、2000メートルの滑走路が東西と南北に二線が敷設され、飛行場の周辺には戦闘機の誘導路が張りめぐらされ、その誘導路は地下掘りこみのコンクリートの格納庫に通じていた。

酒保のクラブやホテルのような将校宿舎、各系統の兵舎、兵站基地などの近代施設が完備されたがその殆んどが10・10空襲で灰燼に帰してしまった。

工事建設に動員された人員は、1日7000人、文字通り人海戦術そのものの大事業だった。1日の荷馬車の動員台数が2000台を越え、特に読谷飛行場一帯は石炭岩が多かつたので、石工だけでも一日700人が動員されていた。

北飛行場の工事に地元読谷村からかり出された労務者は、5000人から6000人ぐらいで、荷馬車は120台前後だったと記憶している。その頃の村長さんは知花清さん、助役は伊波俊昭さん、収入役は山城亀吉さんだったが、読谷村では、軍労務の調達は各字へ割当てていた。読谷村では、村をあげて献身的に協力していたが、我が家の仕事を投げうってかけ参じてもらったものだ。

読谷飛行場に参加した建設労務者の日給は、

技術者が1円30銭、一般が70銭から80銭、動員学徒が35銭だったが、月に2回、いわゆる15日勤定日になると札幌を朝鮮カマス17梱包をトラックに積んで運んだものだ。紙幣も当時は50銭から最高10円までの時代だから、カマスに数えてつめる作業もまるまる5日を要したものである。

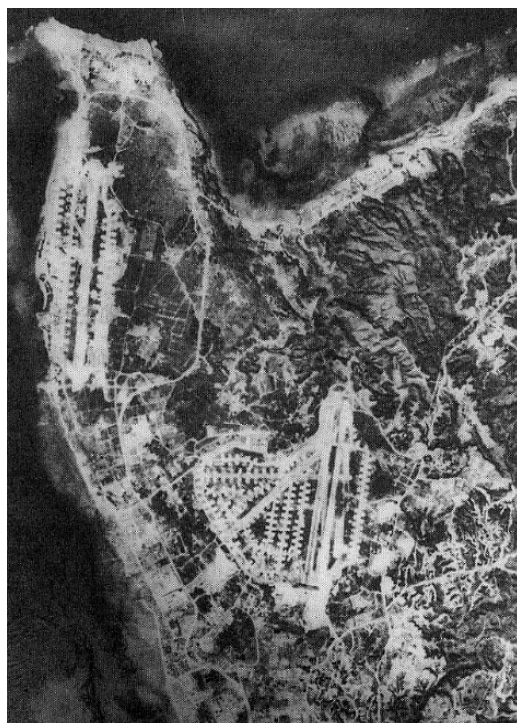
一番の悩みは食糧を手に入れることだった。米を一人に1食当り、2合ぶつの4合と、1食は芋というのが主食の支給状況だったが、制海権・制空権が米軍の手に落ちてからは、特に食糧確保に苦労したものである。国場組自身で東京の食糧庁とかけあって、米は台湾から買い入れたが、10・10空襲後は一人当り、4合の支給量も3合にへらさざるをえなくなった。野菜や芋はトラック4台を使って、北は国頭村から南は摩文仁まで、全島かけずりまわって、やっと間に合わずありさまだった。

米軍の上陸前までに、読谷飛行場で、死亡した民間人の数は20名といわれていたが10・10空襲の時は、突飛のことだったので、事務所から逃げおくれた女子事務員二人（与那城村出身）が焼夷弾であえない最後を遂げた。その後は空襲も間断なく行なわれたので、20名を数えてしまった。

（『読谷村誌』より）

2）土地接収（座喜味）

昭和18年の7月私達の畑に旗が立っていた。何のために立っているのかと、思っていたら、二週間位してから、飛行場建設のために旗が立っているのだと、話しが出て私達は飛行場が造られると、土地はどうなるのかと心配している時に、君達の土地は飛行場用地に使用する、との連絡を受けた。その時から私達は畑仕事も身に入らず、畑のかたわらで集まって土地を取られたら、これからの生活は大変だが反対するこ



昭和20年末の読谷。ほぼ中央が読谷（北）飛行場

とは出来なものかと話していた。戦時中であり、私達が反対でもすると処罰されるのは明らかであり、反対に立ちあがる人はいなかった。

飛行場建設は徹底的に押し進められていった。地主の集まりはあったが、私達としては土地は取られたくない、飛行場は他の場所に変更になればと、願っていたので、地主に対する説明内容も熱心に聞けなかった。

説明会では、反対するどころか、質問さえも出来なかった。

飛行場予定地にはキビ、イモ、大豆等の農作物が植付けられていたが、作物を早く撤去せよとの連絡があり、短期間にこれらの作物を撤去することは無理で手のつけようがなかった。工事は農作物の撤去まで待つてはくれませんでした。建設工事は沖縄中から徴用として馬車をもっている人は馬車徴用として、駆りだされていたから、私達は農作物を撤去するまで、待つてくれないものかと、思っていたがだれ一人として意見する人はい

なかった。大部分の農作物は未撤去のまま飛行場用地として敷きならされていった。

土地は飛行場用地に接収され、これからの生活はどうなるのか、と神経衰弱になった地主もおられた。農地は飛行場用地に接収されたために、いろいろと、土地を捜し求めても、土地を譲る人もいなかった。

座喜味は大部分が飛行場用地に農地を接収されていたから、山を開墾して土地を確保しなければと、開墾に力を入れ、徴用人夫としては少なかった。しかし徴用令状が届くと出なければいけない。そうこうしているうちに、あの空襲だ。その時から家族の身を守るのが精いっぱいであった。畑仕事よりも防空壕掘りの仕事が多く、家畜（ブタ、ヤギ）等も換金せずに野山の草の葉を食料としていたので、家畜をつぶしてその味付として保存していたのである。

家屋も飛行場用地内にあったが、撤去命令がきた時は目の前がまっくらになって、夢ではないかとさえ思った。私は屋敷の近くに土地も求め、これからは生活も楽になると期待していた矢先に、家屋の撤去命令は言葉では表現のしようのない気持ちであった。

飛行場工事は始まっているし、家屋は引越しなさい、引越さないとか家屋もろとも整地する、とまでいわれた。私は、まだ移転先の屋敷も決ってなかったので心配して、いろいろ捜した結果、横田屋に土地を求めることが出来た。馬車を早く頼んで運搬しなければと思って、字中の馬車もち全員に当たったが、飛行場工事に駆りだされていた。仕方がないので他字の馬車を頼みに行ったら、今まで日当10円であったのが、その時から日当15円にもなっていた。

（『座喜味老人クラブ友愛会創立15周年記念誌』より）

3）徴用（宜野湾出身者）

戦局が拡大していくに従って頻繁に徴用があ

り、私も何度かひっぱり出された。それは昭和17年頃だったと思う。最初の徴用は、読谷山飛行場の滑走路建設であった。その時、読谷山飛行場は工区別に施工されていたが、私たちのほうは第5工区で国場組が請け負っていた。

私の職種は石工で、大きな石をくだいてバラスにし、それを滑走路の土台石として敷きつめるのである。宿舎は古堅国民学校に設けられていて、朝は7時頃に朝礼、その後、現場まで歩いて行って5時頃まで仕事をした。徴用なので給料はなかった。

その現場で恐かったのは、工事の総責任者である天野少尉だった。彼はいつも日本刀を腰にさげ、馬に乗って現場を巡視していたが、「なまけたら切ってやるぞ、一人二人は切っても仕事には影響しない」と、すぐにでも切りつけるような意気込みでいうので、彼がくる時間になると、みんなびくびくしていた。なかには、ぶんなぐられる人もいたらしいのだが、私たちの第五工区ではそのようなことはなかった。

（『宜野湾市史第三巻』宮城宇精さんの証言より）

（読谷出身者）

徴用というよりは、金儲けのために人夫として飛行場づくりにいった。馬車も持っていた。すごい軍事景気だった。一週間から10日も行けばかなりの金が入った。昭和18年から19年位までは儲けていた。ただ不安はあった。現金収入が入ってくるので、農業をやらずに飛行場づくりに行った。

10・10空襲の頃からは、本当に戦争が来るということで、その頃からは、お金を持っていもどうしようもないということで、食べられるものは、どんどん馬も豚も潰して、食べ勝負だった。日本軍は食糧難だったが、民間のほうは、そうじゃなかった。

（高志保での聞き取りより）

3 . 10・10空襲

1)『読谷村誌』座談会より

司 会 10・10空襲のときはどうでしたか。
神 谷 あゝもう、那覇のやられるのが、
読谷からも見えましたよ。夜になっ
ても明るいですからね。

比 嘉(憲) 午前7時10分でしたよ。まず大
湾のサカナヤーの下にあった按司墓
の上空から飛行場に向けて急降下し
ましたね。私は、友軍機の演習だと思
っていたんですよ。(笑)

ところが、伊良皆の西側にあった将
校宿舎に爆弾が落ちて、はじめて敵の
空襲だということがわかりましたよ。
私は警防団長だったので、自転車で喜
名の役場までかけつけました。嘉手納
署の喜納警部補が、陣頭指揮をとって、
村民を避難させました。

花 城 謝花の二階ヶヤー(二階屋)が、
まっ先にやられましたね。謝花の家の
隣の松の大木が、ポウポウと燃え
さかるのを見たときは、まったくこ
の世の終りだという感じがしました。

焼夷弾が落ちて蔡温の植えた琉球
松の大木が、つぎつぎと燃えていく
んです。機銃攻撃と爆弾の連続投下
で、まず役場の向いの伊波さん方か
ら火が出て、引火していきました。

比 嘉(憲) 県道の西側にはカヤぶきの家が多
かったの、アツという間に全焼しま
した。ほんとに雨の降るような、焼夷
弾でしたね。馬は逃げるし、女たちは、
消防訓練が徹底していたので、シャ
ベルで、焼夷弾を処理していた喜名
母子のモンベ姿がいまでも目に浮か
びます。

喜友名 駐在の小渡巡査が、精神異常者を収容し
ている座敷牢のところへ、弾の降る中を鍵
をもって飛びこみ、決死的な救出に成功し
ましたね。

ゴーゴー松も、燃えるし、ほんとにこの
世の生き地獄という感じでした。村内には、
金城と西喜名(イリチナー)に高射砲の弾
を積んであったが、これにまともに焼夷弾
が落ちたために自爆して、大変な火事にな
り、字内も大方焼けてしまった。

空襲は7時から始まり10時ごろに終わっ
たが、鎮火したのは午後2時すぎでした。

神 谷 伊良皆では、14、5人の死傷者が出まし
た。徴用の馬車ひきたちがやられたよう
です。

2) 10月10日の空襲

昭和19年9月29日午後1時過ぎ、米軍B29の偵
察があった。秋晴れのはるか上空を白い飛行機雲
で直線の軌跡を描きながら南から北へ悠々と通り
抜けていった。もちろん日本軍は高射砲を打った
が、砲弾は飛行機に届くどころか、はるか下の方
で爆発してむなしい黒煙を残すだけだった。住民
はこの光景を見てなんともやり切れない気持ちに
なると同時に、近々米軍の空襲があることを予感
して心配した。

「10・10空襲」前の米軍の動きは、住民に知る
よしもなかったが、軍首脳部には詳しい情報が伝
わっていた。10月5日12時に台湾軍から「敵機動
部隊ハ比島附近ヨリ北上台湾、南西諸島方面ニ対
シ策動ヲ開始スル算大ナリ嚴重ナル警戒ヲ要ス」
と電報が入っていた。また、佐世保の海軍からは
9日夜「南九州及南西諸島方面部隊ハ指揮官所定
ニ依リレイ明時ノ対空警戒ヲ厳ニスルト共ニ被害
局限ニ留意スベシ」という電令を受けていた。そ
れにもかかわらず、第32軍は10日から兵棋演習を
計画していたので、各部隊長を那覇に集め、9日

の晩は沖縄ホテルで宴会を催していたのである。そして10日の空襲は全く予想していなかった。当日の6時50分頃から民間の監視哨は敵機来襲の情報を球部隊本部へ入れても、軍は真剣に取合ってくれなかったということである。そのため実際に空襲になって20分も経過してようやく空襲警報を発する始末であった。

第56飛行場大隊から読谷飛行場へ派遣されていた重信隊の陣中日誌には次のように記録されている。

「10月10日 晴天 北飛行場 出場人員下士官一兵38 行動(戦闘行動) 0650北飛行場上空二侵入セシ敵機八飛行場始メ周辺施設物二対シ爆撃ヲ開始セリ重信伍長八兵38名ヲ指揮シ甲戦備ヲ命令極メテ危険ナル地点二位置セシ為直二附近低地排水溝二待避スルモ敵戦爆連合艦載機ノ編隊八逐次其ノ数ヲ増シ急降下ヲ以テ銃爆撃ヲ反復スル至リ為二常二至近弾ノ爆風ヲ身近二感ズル状況ニアリ……」

と不意をつかれ、危険な状況下で悪戦苦闘したことが書かれている。防衛庁の沖縄戦史によれば、空襲は五次にわたって行われたが、第一次は6時40分から8時20分までに延240機が沖縄本島に来襲したが、その半数は飛行場が集中している中頭郡を空襲した。攻撃目標は飛行場であり、飛行場を銃撃し、滑走路に爆弾を落して破壊した。第二次は9時20分から10時10分までに延220機の半数が中頭郡に集中した。攻撃の目標はやはり船舶と飛行場であり、飛行場周辺の軍事施設へも攻撃を拡大していった。第三次からは那覇、島尻(60機)に攻撃の重点が移り、中頭(30機)では陣地や民間地域にも攻撃を加えるようになってくる。

この日の攻撃目標の推移を見ると、まず飛行場、その周辺の重要施設、そして陣地、最後に民間地域へと攻撃は移っているが、これは至極

当然なことで、日本軍の基地を破壊して反撃能力をなくしてから、米軍は悠々と思いのままに攻撃しつくしたのであった。

(『座喜味老人クラブ友愛会

創立15周年記念誌』より)

3) 10・10空襲体験

毎日暗い内に起きて、読谷飛行場づくりに行きました。その日(1945年10月10日)は、私達が高志保を通っている時に、敵の飛行機が2機、西の方にとんでいくのを見ました。そして、座喜味の西の方にさしかかった時にはもう空襲は始まっていましたが、私達は「空襲かね」「まさか空襲ではないだろう」「演習ではないか」などと話し合いました。空襲は夜来るといわれていましたし、まさか、あんなに早く来るとは思いませんでした。朝の7時頃ですから……。

何故か知りませんが、その前日、飛行場作業をしている山部隊の兵隊から「明日は、休んでいる人も皆連れて来なさい。」といわれたので休んでいた人々にも連絡して、皆一緒に行きました。その日は、特に多く、一緒に行ったのが12名でした。来ない者は島尻に行かずというから、夜遊びながら皆に連絡しました。

仕事の内容は、飛行場づくりは終わっていて、掩体壕づくりの土運搬でした。座喜味の西の橋のところまで行ってみると、演習ではなく、本物の空襲と分りました。こわくなってオロオロしていると、近くにいたオバさんが、「こっちに壕があるから来なさい、来なさい」と呼んでいた。壕は狭かったが、皆一緒がいいと思い、渡慶次の人2人と宇座の12人が同じ壕に入ったのです。

最初、その壕にはその親子3人入っていたのですが、私達を見ると「この壕に入りなさい、早く来なさい、早く」とオバさんが呼んだのです。帰ろうとした人や、散り散りになって隠れ

ていた人達も「ウマンカイ、壕ヌアンリルムンカックラナ」といって、皆一つの壕に入ったのです。

私達3人（知花ミツ、山内文、知花ユキ）はその壕が狭かったので、最初西側の壕に入っていたのですが「狭くても皆の所がいい」といってもどって来たのです。すると奥の方にいた人々が「奥の方は狭苦しくて、入口の方と変わろう。」というので、交替したのです。（ユキさんは、そのまま入口の方にいた）それから間もなく、その家の後の方に爆弾が落ち、家は潰れ、壕も爆風で崩れ、入口は土でふさがれてしまいました。その為大勢の人が、窒息死してしまいました。

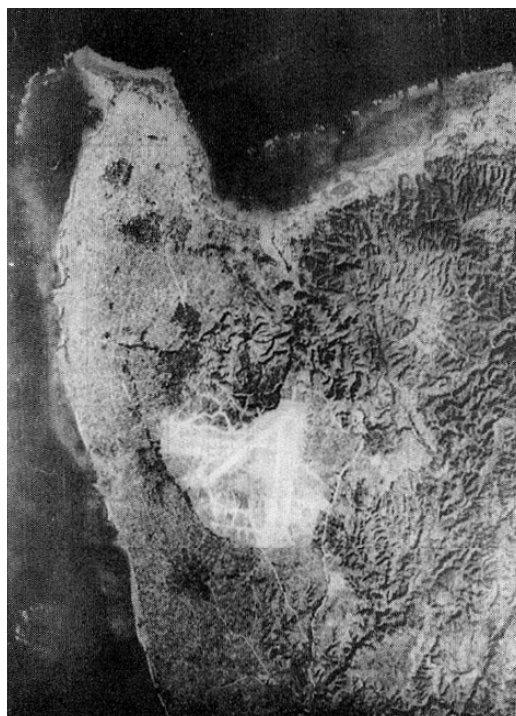
壕の上は道になっていて、中にとじ込められていても上から人の歩くのは音で分りました。靴の音が聞こえると、皆で、1、2、3と「兵隊さん助けて下され、助けて下され」と叫んだのですが、外からはその音が聞えないのです。死力をふりしぼっての叫びもむなしく、次第次第に息苦しくなってきました。封じ込められた人々は出口のない暗い壕の中で「アーナーワンネタシカランムン」といいながら、一人ひとり「天皇陛下万才」を叫びつつ死んでいきました。天皇陛下万才という悲痛な声は、今でもはっきりとおぼえています。

（『残波の里 - 宇座誌 - 』より）

14人の犠牲者は、いずれも宇座、渡慶次方面の人であったが、当日の嘉手納警察署管区内の犠牲者31人の約半数に当たる。このように、軍事基地とその周辺が、戦争になったときにいかに危険であるか、事実をもって証明しているのである。

（『座喜味老人クラブ友愛会

創立15周年記念誌』より）



昭和19年頃の読谷

4) 昭和19年10月10日

座喜味集落の西はずれに爆弾が落ちて14名の犠牲者が出たが、これなどは基地あるがゆえの犠牲であろう。この地域は民家に隣接して掩体壕の東20メートルの民家の横に爆弾が落ちたのである。横掘り防空壕は土で埋り、爆風で民家は倒壊した。又吉矢之助さん達の必死の救助作業で家の下敷きになっている男2人を助け、防空壕からは女2人を助けるのがやっとだった。

4 . 防衛隊

1) 防衛召集概況一覧表(援護課調査係資料より 読谷関係資料を抜粋)

読谷村からの召集人数と召集地

読 谷										部隊名	人員	勤務地	入隊年月日	集合同所
第四遊撃隊	" 二三大隊	独歩十五大隊	六二師団指令部	六二師団輜重隊	" 二二大隊	独歩十三大隊	高射砲部隊	第四九兵站地区隊	特警二二四中隊					
一〇	三〇	二〇	二〇	一〇〇	二〇	五〇	二五〇	三〇	七〇	一五〇	一五〇	北谷村	一九・二・一〇	屋良校
恩納村	那覇崇元寺	" 仲西	"	浦添村前田	浦里市	浦添村	村内	嘉手納				二〇・二・一五	警察署跡	
二〇・三・一				二〇・三・六								二〇・二・二二	北玉校	
安富祖校	崇元寺	仲西校		浦添校			村役所	嘉手納駅				一九・二・一〇・中	屋良校	

他市町村から読谷への召集人数

羽地	宜野湾	浦添	首里	首里	真和志	南風原	豊見城	小禄	市町村名	部隊名	人員	勤務地	年月日	集合同所
五〇三特警工兵隊	五〇三特警工兵隊	五〇三特警工兵隊	五〇三特警工兵隊	五〇三特警工兵隊	五〇三特警工兵隊	五〇三特警工兵隊	五〇三特警工兵隊	五〇三特警工兵隊	第五〇三特警工兵隊					
五〇	一〇〇	一〇〇	二〇〇	二〇〇	一〇〇	八〇	一三〇	一五〇	読谷村	読谷村	読谷村	読谷村	一九・一〇・二	羽地校
読谷村	読谷村	読谷村	読谷村	読谷村	読谷村	読谷村	読谷村	読谷村	読谷村	読谷村	読谷村	読谷村	一九・一〇・二	古堅校
一九・一・一〇・中	一九・一・一〇・中	一九・一・一〇・中	一九・一・一〇・中	一九・一・一〇・中	一九・一・一〇・中	一九・一・一〇・中	一九・一・一〇・中	一九・一・一〇・中	一九・一・一〇・中	一九・一・一〇・中	一九・一・一〇・中	一九・一・一〇・中	一九・一・一〇・中	古堅校
羽地校	古堅校	古堅校	古堅校	古堅校	古堅校	古堅校	古堅校	古堅校	古堅校	古堅校	古堅校	古堅校	古堅校	古堅校

- 1) 読谷村からの召集人数900名(上表より)
 - 2) 読谷村へ召集された人数1,110 (右表より)
- 防衛召集の総数約22,000名

2) 読谷出身者の防衛隊体験

支那事変の際、現役に行って1年ぐらいいしてから戦争が始まった。昭和12年8月召集(熊本)。昭和15年11月3日に帰沖。嘉手納製糖工場で働いていたが、19年に防衛召集。屋良国民小学校に中部からたくさん集まっていた(4中隊位)。1中隊で50人位だったと思う。球部隊1884(?)部隊。戦争の悪化により郷土防衛の為召集。軍隊訓練もした。主に中飛行場の滑走路作りをした。荷馬車でクンノーグシクからコーラル(石

グー) をとってきて滑走路を作った。

多野岳というのがあって、そこは護郷隊が守るべき所だったが、うちの中隊は、食糧もないし、むこうの隊長とも話して、むこうは山の中に相当の食糧を詰め込んであったので、一緒に協力して陣地を守ってくれば、食糧は充分にあるからということだった。あとは、米軍が上陸してきて、さんざんに包囲されてたいへんだった。相当むこうで亡くなった人がいた。昭和20年の5月か6月頃だと思う。

(字渡具知での聞き取り調査より)

屋良防衛隊にいて、山原にさがったから生き残れた。球部隊の指令部は首里だからそこに行こうと、池原までは行ったが、道が遮断されて、そこから南へ行けなかった。引き返してくる部隊と会って、ここから南へは行けないと知った時、これは助かったと思った。が、山原に向かっているのに、どうしても戦闘に参加すると引き返していった人もいた。軍隊と行動を共にしないとたいへんなことになるという、危険をおかして行った人達は殆んどやられた。部隊は山原に引っ越していった。大隊は同じだが、中隊によっては、山原で戦闘した部隊もある。中隊長の命令いかんによって亡くなった人もいる。私のいた4中隊は、金武までしか部隊行動しなかった。金武からはまちまちになった。(4中隊の)中隊長は沖縄の人でまっさきにひきかえした。小隊長は軍曹とか伍長。戦争が始まったから、命ドウ宝といって逃げたわけだね。

読谷飛行場とか喜名の東で戦闘していた負傷兵、その頃からは、敗残兵になっているから、負傷兵のうちでも歩けるものは戦友達が連れていったが、足をやられて歩けない人はあっちからもこっちからも、馬車にすがってくるが、「何故負傷兵をのせるか、負傷兵をのせても戦争ができるか。」と降ろされ出発命令がでた。それでも負傷兵達は、命は惜しいから、何とか一緒に行こうとするが、残していった。自分たちも負傷したらそうなるんだと思った。兵隊ひとりに球¹²⁰ 発、手榴弾 1 発づつもたされた。馬車には米とか食糧を乗せるので、それに負傷兵を乗せるわけにはいかなかった。その負傷兵達はそのままになった。

(高志保での聞き取り調査より)

3) 読谷へ召集された人の防衛隊体験

防衛隊としての入隊は昭和19年10月。防衛隊では1番早い召集と思う。読谷村の古堅小学校に入隊、部隊は、球¹⁸⁸¹⁸ で特設工兵隊。読谷の親志という所で、弾薬庫の壕掘り、それに読谷飛行場の滑走路がアメリカの爆弾でやられるとグリ石を運んできては弾痕の補修作業、これが終ると内地から飛んできた友軍の飛行機の燃料補給をしていた。

(『喜屋武が語る沖縄戦』より)

第2回召集の通知が来たのである。昭和19年で私は34歳になっていた。その時は、読谷山村の古堅国民学校の球部隊に入隊することになった。こちらの隊は、既に軍隊教育を受けた兵隊だけを召集する部隊であり、私たちはその隊にはいって読谷山飛行場建設(北飛行場)、多幸山の陣地構築や壕掘り、そして嘉手納飛行場(中飛行場)建設などの仕事をした。しかし読谷山飛行場は完成させたが、嘉手納飛行場の場合は、途中でアメリカ軍が上陸したため、完成させることができなかった。

米軍は昭和20年4月1日に上陸したわけだが、すでに3月29日頃から上陸作戦を展開しており、読谷山村を中心に艦砲射撃などで集中的に攻撃していた。その時、私たちは小銃と短剣を持たされて、古堅部落の壕にいたが、壕周辺では艦砲が激しく炸裂し、日本軍は抗戦どころではなかった。死者が1度に3名も出るなど、壕周辺はいたましい情景に早がわりした。私たちが数カ月かかって造った読谷山飛行場は、すでに破壊しつくされていた。私もその時、左手首を破片でやられ、肉がとびだしていた。

負傷はしたものの、古堅部落のほうには手当てをする病院もなく、簡単な応急処置をした。

爆撃がいったん止むと、私は喜名部落にあった飛行場警備隊の病院に行き治療を受けた。戦時中ということもあって簡単な治療しかできなかったが、それでも傷口をふさぐことができて安心した。それからすぐ古堅部落に戻ったが、すでに隊は分散状態にあり、統一行動はとれなかった。

(『宜野湾市史第三巻』名城善亀さんの証言より)

昭和19年10月19日再び防衛隊として入隊した。部隊は球部隊で読谷山村古堅国民学校に駐屯していた。そこでは多幸山に弾薬壕を掘るために、毎日約4キロの道を歩いて通ったものであった。ところが空襲が始まってからは、読谷山飛行場の弾痕修理が主な仕事であった。その行き帰りにも再三機銃掃射を浴びたものである。

空襲が日増しに激しくなったので、我々は比謝橋の西方に壕を掘り、そこに移動することになったが、それも束の間、空襲がいよいよ激しくなったので喜名の山に逃げることにした。部隊は全体で約600名ぐらいで、我々はその中の一中隊で、およそ200名位だったと憶えている。

(『宜野湾市史第三巻』崎間喜光さんの証言より)

5 .米軍上陸と読谷での戦闘

1)『読谷村誌』座談会より

司 会 米軍は、4月1日にいったん渡具知に上陸したといわれますが、その辺の状況をお話し願えませんか。

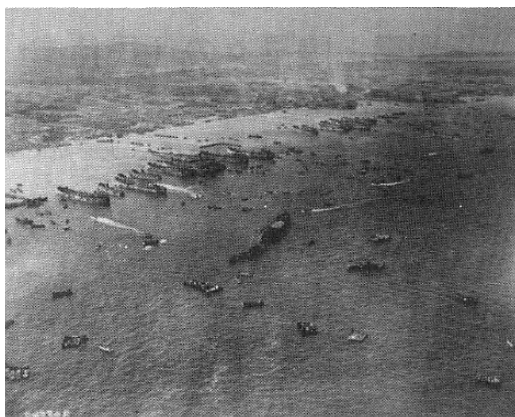
比 嘉(憲) 3月25日から、読谷への艦砲射撃をはじめたのですが、その頃、読谷の沖は軍艦で海が黒くなった感じでしたネ。

宮 本 4月1日の渡具知浜への上陸は、それこそ無敵上陸で、全く交戦はなかったようですネ。楚辺は、住民地域に指定されていたので、国頭に疎開しなかった人たちは楚辺に集っていましたが、そこで捕虜になった人たちもいます。

上 地 渡具知には、何の抵抗もなく上陸したのですが、比謝橋では、激しい闘いが交わされました。比謝橋には、中村中隊長の指揮する完全装備の一個中隊がいて、米軍を迎えうった。この中隊は、南部への交通遮断のために『比謝橋を破壊せよ』との命令を受け、橋を壊し、首里に引き揚げるようになっていた。橋を破壊した後、比謝川を挟んで米軍と交戦、米軍の南下をくいとめた。このほかは、読谷村内での戦闘らしい戦闘はやっていませんネ。

喜友名 アメリカ軍に読谷山飛行場が占領されて、特攻機が盛んに米機動艦隊群に突込んでいる頃のことですが、読谷山飛行場の奪回を図って熊本県の健軍飛行場を飛び立った特攻隊、義烈空挺隊が胴体着陸を強行しております。

本土の新聞の報道によりますと、熊本を飛び立ったのは何機で、また米軍の迎撃にあって殆んどが落されたということ



上陸地点の読谷沖をうめつくした米軍艦

ですが、生き残って強行着陸できたのは何機だったか記憶にありませんが、その特攻隊員の中に、水先案内として大宜味村喜如嘉出身の山城金永という見習士官がのりこんでいて、二階級特進を受けています。米軍の戦史資料によりますと、強行着陸した飛行機はわずか1機で、その飛行機から飛び出した日本軍の特攻隊員が、米軍と戦闘を交わしたという記録はあるそうです。戦闘はやったけれども特攻隊の最後の一員が戦死するまでわずか5分もかゝらなかったということです。

今考えれば、まことに無謀で、悲惨な話ですね。



読谷海岸に上陸する米海兵隊員
(県立平和祈念資料館)

米軍上陸早々の住民捕虜

米軍の上陸地点であった読谷では、上陸とほぼ同時に捕虜となった人々がいた。夫を防衛隊にとられ、男手がなく、幼ない子どもを数人かかえ、山原への避難がままならなかった人、どうせ死ぬなら生まれ育った場所だと読谷に残った人、山原への避難はとても無理だというお年寄、米軍上陸を目前にあわてて避難を始めたが、すぐに捕らえられた人、チビチリガマなどから生き残った人……。

それらの人々が都屋、楚辺等に收容された。

(聞き取りより)



上陸直後に捕虜となった楚辺の老人たち
(県立平和祈念資料館蔵)



難民收容所へ向う楚辺の人たち
(県立平和祈念資料館蔵)

義烈空挺隊の攻撃

(昭和20年5月24日)

大尉奥山道雄を指揮官として、大尉諏訪部忠一を飛行隊長とする120名の決死隊が12機の爆撃機の編成によって行なわれたが、この作戦は義号作戦とよばれた。義号作戦とは、本来マリアナB29基地を爆破するための決死隊として、浜松で訓練されていた特攻隊による作戦としてたてられたものであるが、マリアナ攻撃の時機を失し、特攻隊にその死場所を与えるという意味もあった。

沖縄には6機が到着したが、殆んどが連合軍機動部隊により海上で捕捉され、撃墜され、1機が読谷飛行場に胴体着陸した。

読谷飛行場の強行着陸に成功した8名の決死隊は手榴弾と焼夷弾を手にして、韋駄天の如く八方に走り、8機を完全に焼き、26機を破壊したことが米軍の公表で明らかにされた。

また落下傘によって降下した11名はドラム缶集積所を襲って爆破炎上させ、少なからぬ損害を与えた。そうして全部で69名の日本兵の死体が、読谷飛行場で発見されたというから、上空に到達した兵はことごとく戦死したものと推定される。米軍の公表では、翌日の午前8時まで使用不能におちいった旨が記録されている。

(『読谷村誌』より)



悲惨な死をとげた義烈空挺隊員(読谷飛行場)
(県立平和祈念資料館蔵)

6 . 空襲と避難・疎開

1)『読谷村誌』座談会より

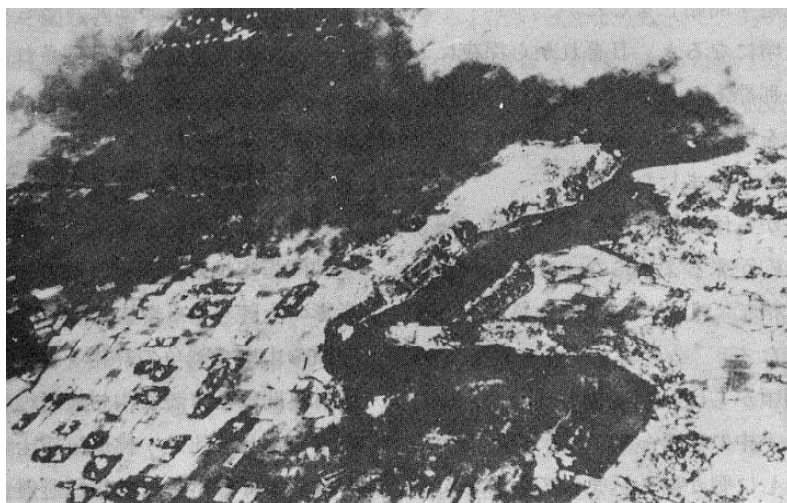
司 会 昭和20年の2月には、島田知事から非戦闘員の疎開命令が出されていますが、疎開の状況や米軍上陸のもようなど話してもらえませんか。

宮 本 昭和20年になると、米軍の空襲も一段と数をましてきたし、日本軍も南部に結集をはじめ、米軍上陸に備えはじめています。読谷も飛行場の対空部隊と飛行場の弾痕整備隊を残して南下しています。2月に島田知事の非戦闘員の疎開命令がでると、海岸ぞいの部落は山原に疎開しました。疎開先ははじめ今帰仁村と指定されていましたが、のちに国頭村に変更されましたネ。

比 嘉(憲) 米軍が上陸作戦のための大空襲をはじめたのは、昭和20年の3月23日でした。3月23日の空襲は、これまでにない大規模なもので、25日には、渡具知の海底電信所も破壊されました。翌26日には県民総動員が出されています。

当 山 あの頃、私は天願の国民学校の校長をしていました。生産増強運動で、毎朝6時には起きて作業をしていましたが、不気味な爆音をたてて、敵機が読谷の飛行場めがけて襲っていました。しばらくすると、読谷飛行場が爆撃され、噴煙が空高く上がっているのが天願からもみえたのです。軍からの空襲警報はでませんでしたが、私はすぐに学校に駆け込み、非常警戒用のサイレンで空襲警報を発しました。私は学校にいた将校から、勝手に空襲警報を出し、民心を騒がせたとさんざんどなられました。10・10空襲の場合もそうでしたが、軍の警報はいつもおくれ、爆撃されても警報は出ないというありさまでした。

宮 本 昭和20年2月に、島田知事から疎開命令が出されたので、村はただちに国頭村に臨時役所を設け、喜友名正武、知花盛吉さんらを派遣し、疎開者の受け入れ態勢を整えることにしました。国頭の人たちが奉仕し、避難小屋など建ててくれましたが、米軍が上陸するまで3分の2はまだ読谷にとどまっていた。



空襲をうける比謝川河口。右側が渡具知



無人の読谷村大湾



殆ど家が吹き飛ばされ、屋敷跡が目立つ波平。空襲の激しさを物語る

上 地 私は役場にいたので、3月25日に、喜名観音堂の側にいた対空部隊に連絡に行ったところ、部隊は移動の準備を整えていました。南部に結集するようにとの指令が出たとのことでしたが、米軍上陸のおそれがあるので、全村民の恩納岳の北に退避するよう指示を受けました。さっそくこのことを全村民に伝えましたが、村民は荷車や肩に、もてるだけの食糧・衣類をもって疎開地の国頭村・奥間・比地・半地・桃原・与那・大宜味村謝名城に向かい退避を開始しました。

花 城 25日頃になると、日暮れから深夜にかけて、那覇あたりからの避難民の群が重い足を引かずって県道を北に向かって進むのもみられましたネ。

神 谷 25日からは艦砲射撃も開始され、民家にも艦砲が来るようになったし、村民も郷里を捨てて北部に避難する気になってきましたネ。

喜友名 その頃からは、制空権も制海権も完全に敵の手中に収まっていて、空と海から間断なしに弾が撃ち込まれていました。昼間、広い県道を歩こうものなら、たちまち餌食

にされました。だから国頭に退避するのももっぱら夜だけです。昼間は海岸のアダン葉の下か山の中にかくれていなければ、飛行機の機銃の雨を見舞われるか、艦砲射撃を受ける。煙もたてることはできず、炊き出しにもずいぶん苦労したものです。国頭の目的地に着くには、恩納・羽地・奥間と3日かかりでした。

上 地 役場も25日には全書類を中庭の壕に収め、とくに重要書類と現金のはいった金庫は、山部隊が島尻に引き揚げた後の壕に奥深くしまった。ところが、戦後いってみると、金庫は壊され、空っぽでした。

2) 村民の避難

1945年1月沖縄戦が近づいて来たので、村民を疎開指定地の国頭村に避難せしめ、村当局も米軍の上陸を見るや昼夜兼行で国頭村に避難し、国頭の山中で戦争の終結を待ったのである。国頭村奥間部落に読谷山村仮役場を置いて此处を中心として比地・桃原・辺土名・伊地・与那あたりまで部落単位の集団避難を実施し、各避難部落では区長を置いて地元部落と緊密な連

繋をとって食糧の配給や村民の保護に万全を期していた。

国頭村の各部落までの避難で、事が済んだのなら読谷村民の犠牲はもっと食い止められたであろうが、敵軍の艦砲射撃も熾烈を極め、1945年4月1日上陸したので、村民はそこにも居たままらずして持てるだけの食糧と家財を持ってかつて入った事もない国頭の深山に入って、山の傾斜面や川岸等に思い思いに立木や竹を切って避難小屋を作って避難をしなければならなくなった。(中略)

村民は国頭の深山に避難し、山中に潜ったばかりでなく、山の掃蕩があるというので米軍を避けて流浪を余儀なくされ、遂には避難小屋も探られて焼き払われ、捕虜になり収容所に連れて行かれる等大苦難の生活が展開されたのである。

3月23日から、沖縄全面に展開された空襲は、北飛行場を有している読谷には殊に、熾烈を極め、3月25日まで少しもおとろえずに続いた。同日の夕刻現地軍から「明朝より艦砲射撃が始まるから非戦闘員は1週間分の食糧を持って、海岸から1里以上離れた所に避難せよ」との命令が出た。この命令は警防団員によって各字民に伝達された。それでいままで避難しなかった各字民も大慌てで国頭へ避難するよう近くの多幸山・恩納山に避難するやら非常なごった返しであった。かくして最後まで村に止まって、家財を守っていた村民も国頭の家族の前に馳せ参じて家族と共に、山中の避難生活に入ったのであった。山中に入った村民は努めて同じ山に入って、共同の体勢をとるようにはしたものの、当時のどさくさでは充分な連絡もとれず、ちりぢりになってしまったが、大体は部落別の集団になっていた。国頭の山は避難小屋を建てるには資材一切揃っていたので、雨露を凌ぐ位の小屋を造るには造作はなかった。それぞれ適当な仮小屋を造って住む事が出来たが、筵・敷物等

持って来る事が出来ず、土間に竹茅を敷いて寝る者も少なくなかった。

山に入った当初は、まずなんとか食糧も手に入れることもできたが、月日が経つにつれて食糧も食い尽くしてしまい、村民は栄養不足で次第にやせ細り、顔色も青ざめていった。4月の初旬に山中に入ってから7月下旬までの避難ではあったが、6月頃からは、栄養失調で倒れる村民も多くなった。村のだれそれが死んだという情報は山から山へもたらされて、村民の窮状は身心ともに深刻であった。山の生活は、ひたすら戦勝を夢見ながら何時読谷に帰れるかを待ちわび、夢見ながらかうじて、生きながらえている状態であった。当時不思議な程に多かった風退治に各人が日当りの良い所に毛布を持って行って余念がなく、この時だけは、戦争を忘れたものだった。昼間は飯を食って寝、夕方から山を下りて食糧集めに部落に下り、夜中一生懸命になってやっと背負える位の量をさがして、夜が明けないうちに山に登って行くといった事がその日々の仕事であった。山の中では、一向に戦争がどうなっているか分らないので、暇さえあれば隣近所の避難小屋を廻って情報を聞き集めて廻った。そして「近く日本の大軍が上陸する」といったような、でたらめな情報にも大いに喜び合う有様であった。

(『読谷村誌』より)

3) 国頭疎開

当時の家族は、長女が2歳、長男が7歳、おかあさんが55歳で、夫は親志部落で、弾薬の警備員をしておりましたが、別に軍人ではありませんでした。

10・10空襲で那覇が大きな爆撃を受けたとき、この辺も爆弾を落されました。しかし、私たちは、防空壕に避難していたので無事でした。

その時、諸見里の部落の、カンジャーヤーという自然壕の上にも、焼夷弾が落ちていました。でも、弾が落ちるのを、直接見たわけではありません。その、カンジャーヤーという壕の名称は、昔、そこで、カジヤを営んでいた人がいたので、それから由来したものです。

次第に、戦況が悪化してきたので、上からの命令で、巡查が、国頭へ疎開するようにと連絡してきたので、私は、2人の子供も連れて、部落の馬車に、家財道具を積み込み、部落の数世帯の人々と一緒に、3月18日の朝10時頃、国頭へ疎開しました。

夜通し、馬車を走らせたので、翌日の朝には、国頭へ着きました。行く途中、安全ではありませんでしたが、3月の夜の寒さは、随分と骨身に応えました。

疎開先の国頭では、伊集という部落の、普通の民家に配置になり、そこで生活していました。

しかし、疎開して5日目の23日からは、国頭の方にも空襲があるようになり、となりの与那部落に弾の落ちる音を聞きました。

山中で仮小屋住い

日増しに、空襲も激しくなってきたので、もうここに居ては危険だということで、山の方に、めいめい仮小屋を建て、部落ごと避難しました。

山の仮小屋に避難してからも、空襲は、ひっきりなしにあったので、畑を耕す余裕もなく、食糧のある限りは、それを食べ、その日その日を生き延びていました。

山に、あがってからは、部落の人々とは、別々の行動をとり、食糧も他の人たちと分けあうということもなく、自分たちが、持ってきた分だけで、生活していました。

米兵の狙撃

食糧が、尽きてからは、蘇鉄なども取って食べました。ある日、蘇鉄を取りに、3名連れだつて、海岸の近くへ行ったとき、米兵に見つか

って、発砲され、弾丸がビュンビュンと飛んできて、身近に突き刺さったときは、「もう今日は、鉄砲で撃たれて死ぬんだなあ」と思い、死を覚悟していました。その時のことを思い出すと今でも、背筋が寒くなる思いです。

その後、山の仮小屋の方にも米兵が来て、仮小屋は焼き払われてしまいました。その時、私たちは、捕虜になりました。

そして、捕虜となった約50名の住民は、前後で、米兵が監視しながら、辺土名の捕虜収容所へ連行されました。

避難中の食糧捜し

また、国頭で生活していた当時の暗い思い出として、食糧もなく、空腹もこれ以上我慢できなくなったので、10名ぐらい一緒に山を降りて、夜、こっそり芋を盗みに行った時でした。

ちょうどその日、芋ドロボーの見張りをしていた部落の警防団に見つかり追われました。私は、どうにかこうにかして逃げることができましたが、私の夫と他の数名は警防団に捕まってしまいました。

私は、捕まった夫の身が心配になり、隠れて夫の様子を伺ってみると、ちょうど「気をつけ」をさせられているところでした。もしかしたら、殴られたりされたかも知れません。

また、芋盗みにはいつも夜中に行っていたので、時にはハブに咬まれる人もおりました。

近くの部落にも芋はありましたが、そこには行かず、わざわざ遠い所の部落へ盗みに行きました。なぜそうしたかという、近くの部落で芋を盗み、そのことが原因でその部落の人といさかいを起し、そこを追い出されたら、行く所もなく困ってしまうからです。山の中で生活しているとき、たまに日本兵とも違いましたが、彼らは皆、心身共に疲れ果てた様子でした。

(『沖縄県史第10巻各論編9』長浜出身者の証言より)

7 . 終戦・収容所

1)『読谷村誌』座談会より

司 会 それでは、話題を疎開先での生活や終戦の頃の話をしていただけませんか。

比 嘉(憲) 日本軍の玉砕と沖縄戦の終えんは、国頭の疎開先の山中で、南部からきた兵隊に聞いて知りました。疎開してから三カ月も経った頃で、配給米はもちろん、各自でもってきた食糧も食べ尽し、荷役に使ってきた馬を殺し、その肉を燻製にして大事に使い、飢えをしのいでいる頃だったので、全く途方にくれました。砲弾の恐ろしさよりも食糧危機に対する恐怖が疎開者の上に重くのしかかってきたという感じがしました。

比地山で、村長を中心に幹部が協議した結果、このまま疎開地に留まるか、南に下るかここまですれば各自の意思に任すほかはないとして、自由行動をとることになりました。

当 山 私は、金武村中山の開拓地にいったので助かりましたが、国頭にいった人たちはだいぶ苦労したようですネ。

比 嘉(憲) 郷里に近づいた方がよいということで、南下するのが多かったのですが、南に下るにしても、昼間県道を通るわけにはいかない。山の中を、しかも夜の闇を利用しての移動なので大変でした。まず子供や年寄りが足手まといになった。そこで孫を残していくか年寄りを残すかという問題で、山小屋でだいぶ苦しんだものです。けっきょく年寄りが、行く先が短いということで、残されることになり、ちやうどうば捨て山のように山小屋に置き去りにされた年寄りがず

いぶんいました。

神 谷 そのような話はずいぶんききました。戦争が終わってから、山小屋に遺骨をとりに行った人の話だと、避難小屋には、当時の状況を物語って、白骨になっていたそうですが、全く胸が裂かれる思いですネ。

比 嘉(憲)『これから南に行くんです』という移動中の一団と山中でよく出会いましたが、誰も彼も栄養失調で青ぶくれている、この世のものとも思われない形相でした。そのころの疎開者の食糧といえは、カンダバー(いもの葉)や蘇鉄があればいい方で、子供が生まれても殆んどが2週間ともたなかったものです。

当 山 中川に疎開したのは、淵上知事時代に建設された拓南訓練所の小屋などがあって大変助かりました。中川や漢那では、この拓南訓練所の小屋を根城にして、山中に引きこもり、夜は夜盗のように里に下りて食糧をあさったものです。国頭に疎開し、南下しようとして山中をさまざま歩いた人たちに比べると楽なものでした。

2) 捕虜収容所

私が、捕虜になったのは終戦まぎわのときでした。もう、その時ほとんどの人々は山を降り捕虜となっていたので、私達も白旗を掲げて山を降りました。

捕虜となってからは、辺土名の桃原部落に連れて行かれました。そして部落の事務所で、ごっちゃになって住んでいました。

そこでの生活は、食糧などの生活物資は配給制でした。そして、元気な人は作業に出て田畑を耕していました。

その後、もと住んでいた部落に帰るようにと

の命令があったので私達は、桃原部落から伊集部落に移りました。

そこでは、伊集部落出身の配給班長がいて、その人が食糧やその生活物資を分配していました。

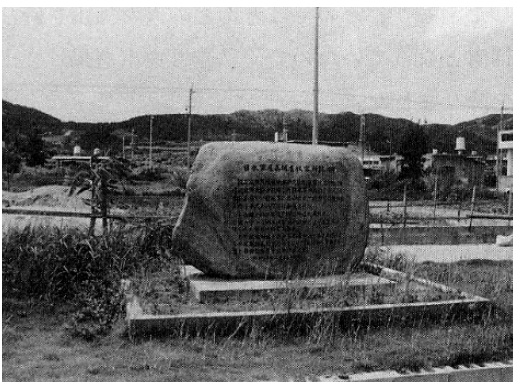
部落の共同作業のとき、私達避難民は自分の食糧の貯えも底をつき、また長期にわたる避難生活で体力も消耗していたので、自分の食糧を豊富に持ち、元気な今帰仁村出身の人たちに比べ、当然作業の進み具合もはかどりませんでした。

そのことを口実にして、その配給班長は、食糧を配給するときに、今帰仁村出身の人々には多く配給し、私達には少なく配給し、まったくひどい差別をしていました。

そこで、私達はこんな差別や食糧難のところにいつまでもいることは出来ないと思い、旧の10月16日の夜、10名ぐらいの人達と一緒に、こっそりその伊集部落から抜け出しました。

夜通し歩き続けて、金武村の中川部落に着きました。そこには、親戚がいたので4～5日滞在していました。それから、石川の捕虜収容所に行き、そこで生活するようになりました。

石川で生活するようになってからは、私も軍作業に出ていたので、軍から食糧や衣料品などをもらうこともあったので、そんなに食糧に事欠くということはありませんでした。それはもう、国頭にいたときとは比較にならないほど生活に余裕ができました。



屋嘉の収容所跡の碑

国頭で生活していたときは、食糧といっても配給される豆ぐらいなもので、私は、マラリアにかかっていたときも、その豆しか口にすることができませんでした。

マラリアは、国頭で捕虜になった直後かかったもので、当時は非常にマラリアが流行していました。私は、このマラリアに石川にいるときまで悩まされたものです。

私達が、国頭から石川に移ってきたときは、もう石川は食糧も豊富に出回り、町のように活気がありました。しかし、国頭ではまだまだ食糧難でした。

ある日、私が米軍の配給車からこぼれ落ちた食糧品を拾って持っているとき、班長が来て、これは、米軍に返すものだからということで、私から取り上げました。しかし、あとで部落の人が「あなたから取り上げた食糧は、“チュ、エンチュ”が食ってしまったヨ」と教えてくれました。

これは、私から取り上げた食糧を、班長は米軍には返さずそのまま自分で食べてしまったということです。

石川の収容所

石川に移ったとき、もうそこは避難民収容所になっていたもので、那覇市やいろんなところから大勢の人々が集まっていました。

その避難民収容所では、何区、何区と班に分けてあり、班ごとに芋掘り作業などがありました。そして、必ず一家から1人ずつ出るようになっていました。

後に、米軍が洗濯する人を何名か出して欲しいと頼んできたので、各班から女の人を3名ずつ選んで洗濯に行かすことになりました。そして、私もその日から洗濯に行きました。

しかし、最初のうちは米兵が恐くて、今日は、この人が行きなさい。明日はあの人が行くようにと言って、毎日交替し交互で行っていました。

(『沖縄県史第10巻論編9』長浜出身者の証言より)

8 . 読谷村建設

1) 読谷村建設隊

1945年8月、日本の降伏によって、中北部の収容所にいた人たちは、それぞれ自分の村に復帰をはじめた。しかし読谷山には、飛行場をはじめ、米軍の施設が多かったため、村民の復帰は許されなかった。

1946年4月、戦後初代の村長に任命された知花英康氏は、胡差に読谷山村仮役所を設置、東恩納にあった民政府と読谷村民の村への復帰を要請した。同時に、各地の収容所に散在している村民と連絡をとり、移動の準備を整えた。戦災でほとんど破壊されたとはいえ、当時村内には残存家屋もかなりあったし、畑には芋も沢山あったが、近くの収容所にいた人たちがトラックでこれらの家屋を崩して持ち去ったり、農作物も荒された。そこで、当時の仮役所はこれらの資材・家屋・食糧などを保護することに力を注ぎ、胡差や石川から交替で監視を出すことになった。

村民の切なる訴えと、民政府当局の尽力で1946年8月、ようやく波平と高志保の一部が解放されるようになった。知花村長は、ただちに600人の『読谷村建設隊』を編成し、これを引き連れて郷土に乗り込んだ。

当時の読谷山は、見渡す限り米軍施設で、戦前の面影は全く消え失せていた。木は切り倒され、石垣や垣根は破壊され、すすきや雑草が延び放題にはびこり、部落の中に山鳥が巢食い、マンガースーが徘徊し、山羊や牛馬の骸骨などもあって全く廃虚と化していた。勢い込んでやってきた建設隊も茫然自失、全く何から手をつけていいかわからない状態だった。

それでも建設隊は、『協力して村再建に挺身し、理想郷を建設する』ことを誓い合い、知花

英康村長のもとに、総務・建設・農耕・衛生・食糧の5つの部を設け、まず戦災を免がれた家屋を修理して宿舍にあて、建設にとりかかった。

(読谷山村建設隊綱領)

1、われらは、協力一致をもって郷土読谷山の建設に挺身す。

1、われらは、公正明朗誠実を旨とし、もって村民の信倚に応えんとす。

1、われらは、篤実剛健責任を重んじ、謙讓親和をもって理想郷の建設を期す。

(宣 誓)

戦いに追われ、村を出てからすでに1年有半、今月許されて村に入り、村再建の仕事に取りかかることを考えると誠に感慨深いものがあります。われら建設隊員一同は、村長殿のご意志をくみ、各部長の注意を守り、誠心誠意、村再建の仕事にあたり、ひとつには戦争の犠牲になって死んだ人々に対する務めを果たし、ひとつにはいまなお各地に散在して、村に帰る日を毎日待ちわびている村民の期待にそいたいと決心しています。以上決意を述べて宣誓といたします。

1946年8月12日

村建設隊長 山 内 昌 正

建設隊員は、まず散乱している廃物を片づけ、屋敷を整理し、規格住宅の建築にとりかかった。衛生部員は埋められた井戸を浚渫し、便所をつくり、農耕部員は野生の甘藷や野菜を採集して建設隊の食糧に供しながら農耕計画にあたった。また村内をくまなく監視して資材を保護、建設の進行に努め、建設隊による村再建の作業は秩序正しく進んでいった。

ところが8月31日、米軍は突然建設中止の命令を出し、民政府は『あす中に読谷山から立ち退くよう』命じた。知花村長は9月1日、東恩納の民政府に志喜屋孝信知事、又吉康和総務部長らを訪ね、読谷山村の実情を報告するとともに、『村建設が中止されては、村長としての職

にあることは無意味である』として辞表を出した
が慰留された。

折角村民の故郷への復帰の夢をかなえようと
して、村再建に努めてきた建設隊は、涙をのん
で引きあげたが、9月11日になって中止命令は

解かれ、同時に住居許可地域も広げられた。知
花村長以下建設隊は元気百倍、再び9月16日に
は村再建の仕事にかかった。隊員も、これまで
の600人から700人に増員、新しい陣容を整えた。

(『読谷村誌』より)

2) 読谷村民各地区分散居住状況調

(1946年9月) 資料仲本政公民提供

	石 川	コ ザ	前 原	中 川	漢 那	宜野座	久 志	田井等	辺土名	計
喜 名	442	93	13	154	309	116	38	85	45	1,295
親 志	102	12		9	16	51		12	30	232
座喜味	584	79	41	222	376	114	16	15	9	1,456
伊良皆	227	26	42	56	70	23	48	5	4	501
上 地	39	10	13	6	10			1		79
波 平	1,066	237	7	102	290	17		7		1,726
高志保	298	24		439	138	1	4			904
渡ヶ次	583	23	15	53	98	208	17	13		1,010
儀 間	353	3		45	82	64	14	20	4	585
宇 座	250	30		189	350	10	6	5		840
瀬名波	556	19	29	42	64	77	3	17	5	812
長 浜	791	11	3	53	38		5	4	3	908
楚 辺	1,293	38	35	28	28	40	12	41	2	1,517
渡具知	263	16	15	4	19	89	36	22	41	505
比 謝	137	23	32	17	15	74	10	5	8	321
大 湾	166	11	9	20	52	71	64	32		425
古 堅	223	36	16		19	176	15	21	4	510
大 木	220	10	4		4	5	12			255
比謝橋	113	16	13			51	8	3		204
牧 原	278	36	19	7		32		11		383
長 田	64	9		39	25				6	143
計	8,048	762	306	1,485	2,003	1,219	308	319	161	14,611

「国頭、羽地、金武、久志各村の山中にさまよい続けた村民は終戦後米軍の保護を受けながら食を求め或は故郷の近くにと石川、中川、漢那、宜野座、コザ方面に次第に集団するようになった。」

(『村の歩み』読谷村役所発行より)

3) 村民の帰村状況

1946 (昭和21) 年

- 8月6日 波平・高志保区居住許可
- 8月12日 読谷村建設隊を組織し読谷村建設に着手
- 8月31日 住民移動中止命令により建設隊読谷村を引き揚げる
- 9月11日 移動中止命令解かれる
- 9月16日 建設隊再び建設に着手
- 11月15日 楚辺・大木区居住許可
- 11月20日 村民の第一次移動開始 (12月12日完了 辺土名・田井等・久志方面から約5千人が帰村。
高志保以北の字民は高志保へ波平以南の住民は波平へ)
- 12月1日 読谷村役所開設

1947 (昭和22) 年

- 1月28日 建設隊南部支部を楚辺におき建設に着手
- 2月21日 第二次移動開始 (3月6日完了。主に宜野座方面から)
- 4月1日 波平に居住していた古堅校区の人達が、楚辺・大木方面へ移動開始
- 5月1日 第三次移動開始 (6月24日完了。漢那・中川・城原方面から)
- 6月7日 村民が帰村に伴い慰霊祭を行う (読谷初等学校校庭)
- 8月14日 第四次移動開始 (胡差方面から)
- 10月16日 瀬名波・渡慶次・儀間居住許可
- 11月9日 第五次移動開始 (石川市から。村民の移動ほぼ完了。1万4千余の村民が再び郷里に定住)

1948 (昭和23) 年

- 4月15日 建設隊感謝状贈呈式並びに移動完了祝賀会

(『読谷村誌』より抜粋)

4) 字への復帰状況

- 喜 名 1948 (昭和23) 年12月1日に一号線 (現国道58号線) 以西に移動
- 座喜味 1947 (昭和22) 年8月東川に移ったのち、1952 (昭和26) 年旧部落解放
- 上 地 1950 (昭和25) 年6月旧部落へ移動
- 波 平 1946 (昭和21) 年9月全面解放
- 高志保 ”
- 都 屋 1950 (昭和25) 年6月全面解放
- 渡慶次 1947 (昭和22) 年移住許可になり移住したが、1948年5月に立ち退き命令が出され再び立ち退き、1954 (昭和29) 年4月に全面解放
- 瀬名波 1947 (昭和22) 年10月全面解放
- 長 浜 1951 (昭和26) 年全面解放
- 楚 辺 1947 (昭和22) 年旧部落に移動したが、1952 (昭和27) 年5月再び米軍に接収され、現在地へ移住

渡具知 1950（昭和25）年旧部落に移住したが、1954（昭和29）年6月に再び接収され、比謝西原に移り現在にいたる

比 謝 1951（昭和26）年旧部落へ復帰

大 湾 //

古 堅 1954（昭和29）年6月旧部落の北側（現在地）に集団移動

大 木 1947（昭和22）年4月移住許可

宇 座 } 一部は長浜の地積である読谷バスターミナル付近一帯にややまとまって移住
儀 間 }

比謝缸 } 大木地域に移住し、大湾・比謝の東側の解放方を関係当局に対し再三再四陳情を行ったが、
長 田 } 軍施設の関係上解放できない旨の回答に接し、逐次旧比謝缸付近、大木周辺に敷地を購入、
住居を建築し、次第に落ち着く

牧 原 大木地域に居住していたが、1961（昭和36）年の始めに比謝伊保堂原と伊良皆西佐久原に敷地を共同購入し、1962（昭和37）年から新部落建設に着手し1965（昭和40）年までに移住を完了

（『読谷村誌』より抜粋）

9 . 平和の誓い新たに

1) 読谷村の字別戦没者数(軍人・軍属)

字名	所 属	陸 軍				合 計	海 軍			合 計	不 明
		雇	軍 属	軍 人	不 明		軍 属	軍 人	不 明		
喜 名		0	27	82	0	109	9	5	1	15	2
親 志		0	0	15	0	15	0	3	0	3	3
座喜味		1	30	98	0	129	12	7	0	19	3
伊良皆		0	7	49	2	58	6	4	1	11	1
上 地		0	2	6	1	9	0	0	0	0	0
波 平		15	30	197	0	242	21	5	1	27	2
都 屋		0	0	18	1	19	2	2	0	4	2
高志保		0	12	76	0	88	7	5	0	12	1
渡慶次		0	18	55	0	73	12	7	2	21	2
儀 間		0	10	35	0	45	6	1	0	7	0
宇 座		0	13	45	0	58	13	6	0	19	3
瀬名波		0	7	61	0	68	6	0	0	6	0
長 浜		0	13	74	0	87	7	3	0	10	2
楚 辺		0	30	106	3	139	6	7	1	14	1
渡具知		0	11	40	0	51	2	0	0	2	0
比 謝		0	4	12	0	16	2	0	0	2	0
大 湾		0	11	32	0	43	3	4	0	7	3
古 堅		0	8	26	0	34	7	0	0	7	0
大 木		0	11	23	0	34	6	0	0	6	1
比謝缸		0	6	17	0	23	3	1	0	4	1
牧 原		0	8	26	0	34	4	4	0	8	2
長 田		0	0	6	0	6	2	1	0	3	0
合 計		16	258	1099	7	1380	136	65	6	207	29

戦没者(軍人・軍属)総合計1,616名

(援護関係名簿より作成)

読谷村が1957年に発行した『村の歩み』では、読谷村の戦没者について、「第二次大戦の米軍沖縄本島上陸の地となり激戦場となった本村は、2,000人余の犠牲者を出し、村民は各地に散り散りになった。」としており、はっきりとした戦没者数を出していない。厚生課援護係の資料による、軍人・軍属の戦没者数は1,616名。(上表)『村の歩み』の「2,000人余」という数字は、昭和15年10月1日現在の国勢調査による読谷村の人口15,883人(男7,513人、女8,370人)の約12.6%を占める。調査が進むと、戦没者数は更に増えると思われる。

2) 慰霊の塔にこめられた想い

現在わかっているだけでも、2000人余（読谷の当時の人口の約13%）もの尊い生命を奪い、今まで築きあげてきた全てのものを焼きつくして、沖縄戦は終わった。

中北部の避難先や収容所から村へ帰った人々は、変わりてた故郷の姿に驚きながらも郷土復興の意気に燃えた。

ゼロどころか、ないないづくしのマイナスからのスタート。人々は土地を耕やし、家をつく

り、部落を再建していった。と同時に最愛の肉親を奪った戦争への反省とその犠牲になった方々の慰霊のための塔づくりが始められた。

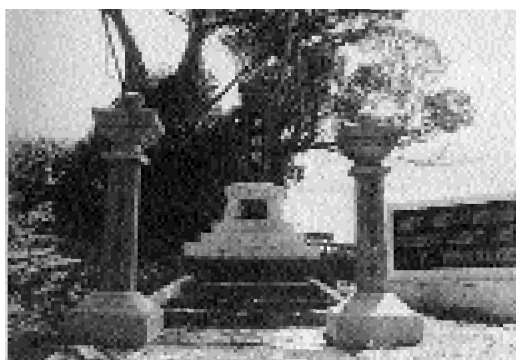
永久に平和を譲る護永の塔、宇座を守る宇座守の塔、永久の平和を願う平和の塔、永遠の平和を祈る永和の塔……。平和な社会を築くことを誓い、亡くなった方々の冥福と永遠の平和を祈った。

そして——平和の誓いも新たに、たくましい足跡を刻み始めた。

字民を祀る慰霊の塔一覧（建立年月順）（ ）内の数は支那事变以後の合祀数

名称（字）	所在地	建立年月・経過等	合祀数
忠魂碑 （渡慶次）	渡慶次227	大正2年10月 建立 昭和25年12月 大東亜戦争犠牲者碑建立	127 (121)
平和の塔 （波平）	波平東原222	昭和3年 忠魂碑建立 昭和26年12月 平和の塔建立	319 (316)
宇座守の塔 （宇座）	長浜武理石原1744	昭和25年3月 慰霊塔、招魂之塔建立 昭和40年9月 二つの塔を統合し宇座守の塔建立	139 (138)
永和の塔 （座喜味）	座喜味154	昭和26年 8月 建立 昭和61年12月 再建立	163
さくらの塔 （高志保）	高志保217	昭和32年夏 建立	250
護永之塔 （喜名）	喜名松川原466-1	昭和34年 5月 建立	167
真砂之塔 （長浜）	長浜236	昭和34年 6月 建立	104
永魂之塔 （儀間）	儀間143	昭和34年11月 建立	112
慰霊之塔 （伊良皆）	伊良皆570	昭和34年11月 建立	97
慰霊塔 （大湾）	大湾渡慶次当原586	昭和34年12月 建立	43
慰霊之塔 （楚辺）	楚辺1923	昭和36年 2月 建立	345
永和之塔 （瀬名波）	瀬名波138	昭和44年 9月 建立	75 (74)
慰霊碑 （大木）	大木379	昭和56年 3月 建立	45

読谷村内の慰霊の塔写真



忠魂碑（渡慶次）



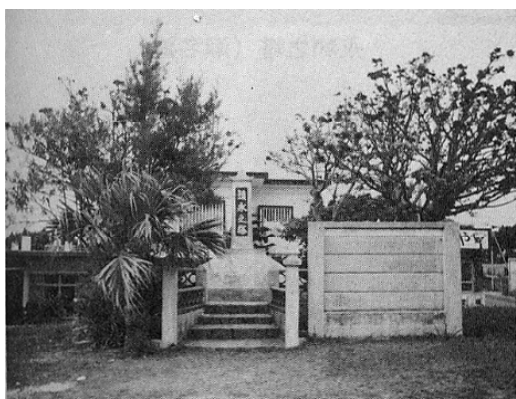
平和の塔（波平）



宇座守之塔（宇座）



（旧）永和の塔（座喜味）



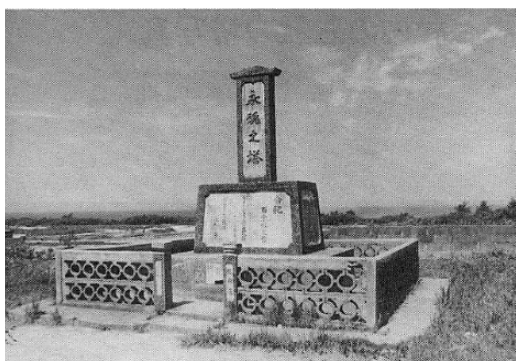
護永之塔（高志保）



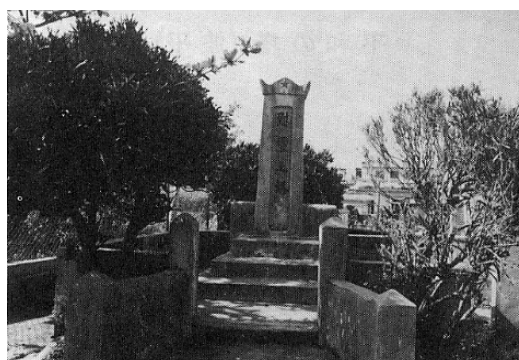
さくらの塔（喜名）



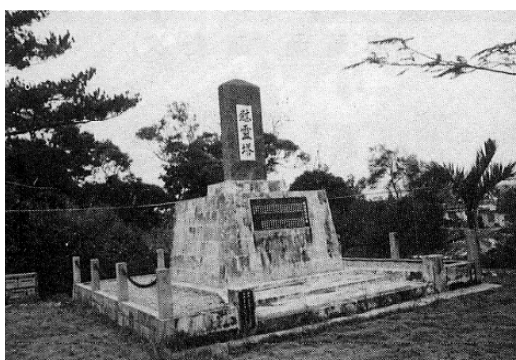
真砂之塔（長浜）



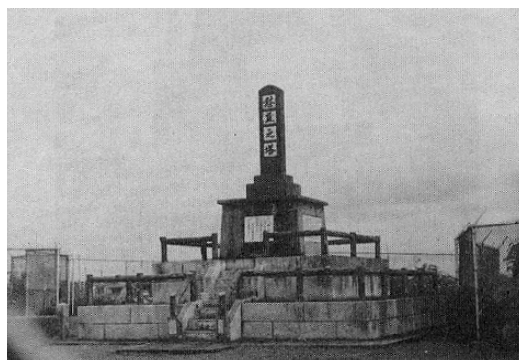
永魂之塔（儀間）



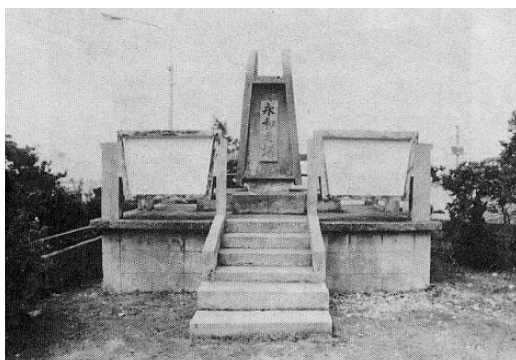
慰霊の塔（伊良皆）



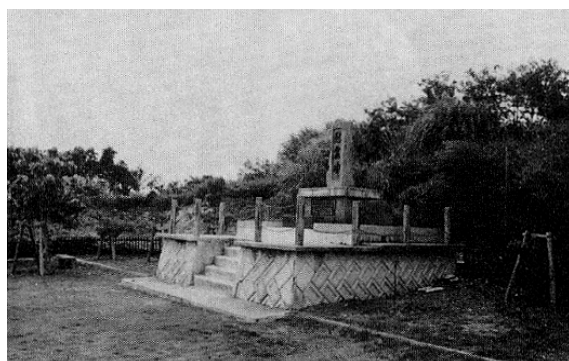
慰霊塔（大湾）



慰霊之塔（楚辺）



永和之塔（瀬名波）



慰霊碑（大木）